

# 小倉正恒

平成26年9月27日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

## 1. はじめに

広瀬幸平、伊庭貞剛、鈴木馬左也と住友総理事の解説をすると、次は中田錦吉、湯川寛吉であるが、二人の伝記本はない。そうなる小倉正恒となる。新居浜で小倉について語られるときは常に鷲尾勘解治との関係で語られる。

改めて、住友から大蔵大臣になった小倉の幅広く奥深い生涯について紐解く。

## 2. 本の刊行

昭和38年 2月 小倉正恒伝記編纂会が設置される。

100回以上の幹事会を開く。

昭和40年3月20日 「小倉正恒」刊行。没後4年に当たる。鈴江幸太郎、川崎英太郎、岡野廉平、平野國太郎、濱田正男、岸本升らが編集、執筆に当たる。

## 3. 本の構成

表紙

写真 肖像 家族 大臣親任式 筆蹟

序 小倉正恒 4ページ

総目次 1ページ

小倉正恒

目次 3ページ

金沢城下図 挿入

正恒の生涯 476ページ

遺稿

筆蹟

遺稿目次 4ページ

遺稿 207ページ

追想

筆蹟

追想目次 5ページ

追想 265ページ

年譜	20ページ
後記	6ページ
奥付	1ページ

— 目次 —

正恒の生涯

家系	P. 7～	理事となる	p.209～
出郷	p. 31～	常務理事(1)	p.225～
東京遊学	p. 63～	常務理事(2)	p.249～
官吏時代	p. 81～	総理事(1)	p.279～
住友に入る	p. 93～	総理事(2)	p.329～
よい先輩たちと	p. 125～	入閣	p.381～
総本店支配人(1)	p. 153～	中国淹留 <sup>おんりゅう</sup>	p.411～
総本店支配人(2)	p. 181～	晩年	p.435～

4. 写真の筆蹟

I	誠者天之道也	誠之者之道也	誠は天の道なり
		八十四叟 正恒	誠の者の道なり
II	古人刻世光	明必盛大也	古人は世光を刻む
		蘭齋	明は必ずや盛大なり
III	天蠖之屈以求伝也		天はこの屈をとることを以て伝を求めりなり
		蘭齋	
IV	一日此君不可無	癸未仲夏	一日これ、君は無なるべからず
	緑松富風竹	㊦	緑松は風竹に富む

[癸未：昭和18年 仲夏：陰暦5月]

5. 正恒の生涯の概説

正恒の生涯

家系

明治8年(1875)3月22日、金沢の大衆免に生まれる。

小倉家は、前田家の領地となっていた越中五個庄下梨村の出であることは疑いない。厳しい自然環境が小倉家の子孫に不退転の意力を内蔵したのであろう。前田利常の時に小倉家の始祖が金沢に出る。

— 正恒の父・正路までの家系を綴る —

**大衆免:**大衆免中通り55番地の生まれ。金屋町から大衆免の地域に通じる中央の道筋で、春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆利用の作田地として諸役が免じられていた。現在の森山1丁目。挿地図の金沢城下図を参照。

#### 出郷まで

祖父・永政は、加賀藩の八家に次ぐ人持組の西尾家の家老を務め、経営の才能を有した相当な人物であった。父・正路は、裁判所判事で明治維新にあっても生活は安定していた。

明治13年(1880)1月、養成小学校に入学。

明治17年(1884)9月、上級校の精練小学校に移る。翌年には金沢小学校と改称。

明治19年(1886)、石川県専門学校に入学。

明治20年(1887)、学制改革で石川県専門学校は廃止、創設された第四高等中学校の入試を経て通過する。

明治25年(1892)9月、第4高等中学校本科に進学。

明治27年(1894)7月、第4高等中学校本科を卒業。

#### 東京遊学

明治27年(1894)9月、東京帝国大学法科大学英法科に入学。

金沢関係者でつくる十四会を、しばしば訪ねて指導を受け、無刀流も学ぶ。十四会には鈴木馬左也もいた。日清戦争が勃発したが、真面目に学問に務める。先輩の井上友一に随って名士を訪ねるのを好む。最も感銘を残し、影響を受けたのは、勝海舟と高島吞象の二人であった。剣と禅は、後には正恒の身体と心気を養う根本となる。

明治30年(1897)7月、東京帝国大学法科大学英法科を十指に入って卒業する。

**十四会:**明治14年(1881)ころに東京大学予備門にいた金沢出身者を中心にして金沢ゆかりの人の集まり。結成年、結成人数からの命名と言われている。禅宗、学問、思想、武芸などの共同学習や鍛錬を通じてお互いに強靱な主体性の確立を求めた。

**高島吞象**は、本名が嘉右衛門。江戸末期から明治・大正時代の大激動期に、建設業・土木業で江戸・横浜を中心に大成功を収めた実業家及び易断家。伊藤博文と親交が深い。易断による占いも有名で「易聖」と呼ばれる。易断の集大成の「高島易断」を著す。「高島易断」を名乗り名声を利用したものが続出したが、いずれも関係ない。

#### 官吏時代

明治30年(1897)7月、内務省に入る。

明治31年(1898)12月、山口県参事官になる。広島県知事と漁業権の折衝をする。

法律論一本で押す広島知事に対して、正恒は両県の漁民の生活実情を大切にした現実論で対抗する。

県庁の宴会で、酔いに任せて知事夫人が出しゃばるので、知事の横っ面を殴る武勇伝もあった。

明治32年(1899)5月5日に山口県参事官を辞し、5月19日に住友に入る。葛藤よりも住友家の伝統的事業精神が勝った。

### 家 法 前 文

「予洲別子山の鉱業は、万世不朽の財本にして、その業の盛衰は、わが一家の興廃に関し、重かつ大なる、他に比すべきものなし。ゆえに旧来の事跡に徴して、将来の便益を謀り、益盛大ならしむる事。

わが営業は確実を旨とし、時勢の変遷、理財の徳失を計りて、これを興廃し、苟しも浮利に趨り、軽進すべからざる事。」

### 文 殊 院 趣 意 書

商事は言うに及ばず候えども、万事情に入らるべく候。

- 一、何にても常の相場より安き物持ち来たり候えも、根本を知らぬものに候わば、少しも買い申すまじく候、左様の物は盗物と心得べく候。
- 一、何たる者にも一夜の宿も貸し申しすまじ。また編笠にても預かるまじく候。
- 一、人の口合い、せらるまじく候。
- 一、掛商い、せらるまじく候。
- 一、人何ようのこと申し候とも、気短く、言葉あらく申すまじく候。何様重ねて、具に申すべく候。 以上 孟春十日 草名(花押)

住友に入る

—住友家の系譜を綴る—

正恒が招かれる前後は、住友家が、事業の進展に応じ、次の発展に備えて多くの人材を招聘した時であった。河上謹一、上村俊平、藤尾録郎、大場多市、志立鐵次郎、中田錦吉。

伊庭貞剛が早くから鈴木馬左也を後継者と囑目したように、正恒の人物、器量について貞剛、馬左也から住友家の新しい指導者として思われていたようである。馬左也と正恒の繋がりには、金沢の地縁だけでなく好学と求道に相似の性格によると考えられる。

明治32年(1899)6月、倉庫事業の創立の事務に携わる。7月倉庫本店勤務。

明治33年(1900)1月、住友銀行神戸支店に移る。4月28日に3年間の洋行に出発する。ロンドンで2ケ年商務研究をする。ロンドンには竹馬の友の木幡西吉が公使館

に勤務していた。遅れて夏目金之助(漱石)、土井林吉(晩翠)、姉崎正治も留学してきた。

明治35(1902)年6月ころから、フランス、ドイツ、アメリカを廻って、12月15日に帰国する。

正恒が外遊していた3ケ年で住友の事業も大きく進展していた。宮城前に楠正成の銅像を建て、大阪中之島図書館を大阪府に寄贈していた。住友鑄鋼所を開設、住友銀行本店を移転拡張、日本倉庫(株)の買収。別子銅山でも第三通洞が貫通、端出場発電所の建設にも着手し産銅が躍進する。

### **金沢の地縁:鈴木馬左也は、明治9年(1876)6月～明治10年(1877)6月、金沢の石川県立啓明学校に遊学した。**

よい先輩たちと

明治36年(1903)1月、本店副支配人心得となる。事業全般の中樞の一人となる。総理事・伊庭貞剛、理事・河上謹一、田邊貞吉、鈴木馬左也がいて、首脳陣に日々指導された。正恒は馬左也に続き剣道に励み、禅道に参禅する。

3月から7月まで天王寺で第5回国内勸業博覧会が開かれ、家長が協賛会長となり、正恒も参画奔走したのであろう。

明治37年(1904)7月、神戸支店支配人心得兼銀行及び倉庫神戸支店支配人になる。六甲山に登山し心楽しみ、前年完成した住友家の須磨別邸に出向き家長の信頼が一層深くなる。2月に初めて別子銅山を見る。そして、5月に河村善益の長女信と結婚する。信の母は馬左也の従妹であった。

明治39年(1906)1月、神戸支店支配人になると、偽造小切手支払事件があったが、「実に上手に偽造したものだ。わしでも間違えて支払っただろう。」と言って出納係を責めなかった。30歳で腹の据わった人物となっていた。

3月、住友家の子女と家庭教師・リチャードソンと別子銅山に遊ぶ。11月、四阪島製錬所の落成式に参列する。

明治41年(1908)8月、3度目の別子銅山出張後に副支配人として本店に戻る。

**剣道と参禅：学生時代に大徳寺の廣洲和尚について参禅し、無刀流の剣道を修めて体を鍛えている。3ケ年の欧米生活から日本の生活に戻るのに精神的努力が必要であった。住友の将来の最高責任者を目指して再出発するには一つの精神的核が必要であった。そのために、剣の修業と参禅による自己鍛錬に本格的に取り組む。正恒の実践の根本原理は「まこと」であった。**

総本店支配人(1)

明治41年(1908)9月、別子の煙害騒ぎが大きくなり別子鉱業所に出張する。

明治42年(1909)1月～3月、尾道会談に先立ち「煙害問題小誌」に研究を記す。

明治42年(1909)4月、尾道会談に鈴木馬左也総理事に随行する。

明治43年(1910)10月、農商務省で煙害賠償契約が成立した。この少し前に、正恒は山下芳太郎と硫酸製造と肥料製造の事業開業を前提に検討を命じられていた。翌年2月提出の報告書では、肥料製造着手と煙害問題を切り離すことを強調。やがて塔式硫酸製造の特許を得て大正2年(1913)に新居浜に住友肥料製造所の開設となる。

明治44年(1911)7月、茶臼山建築事務取扱所委員長を兼務する。

大正2年(1913)6月、大平駒槌とともに支配人になる。

大正4年(1915)10月、財団法人住友私立職工養成所としたので理事になり、翌年4月に開所する。正恒はいよいよ多忙になったが、勉学修道は弛むことがなかった。

## 総本店支配人(2)

中国の古典は、正恒の道義心、知識、情操を育て、性格、人生観の骨格となっている。中国は心のふるさとであった。

大正5年(1916)3月、総理鈴木馬左也の中国、満朝視察に随行する。辛亥革命、第一次世界大戦という情勢下での事業進出の端緒をつかむ狙いであった。

**辛亥革命:1911年辛亥の年に勃発し、清朝打倒の革命。翌年、南京に孫文を大統領とする臨時政府が樹立して中華民国が成立した。しかし、清朝は北洋軍閥の袁世凱を使って鎮圧したが、袁世凱は清朝の宣統帝を退位させて、孫文に代わって臨時大統領になった。**

— 2月余りの旅程を綴る —

大正5年(1916)11月、上海に住友洋行と住友銀行支店開業、翌年1月には漢口に洋行と銀行支店開業、7月には天津にも洋行を開業。やがて朝鮮でも植林事業着手。

9月に財団法人懷徳堂記念会の理事になる。後に昭和2年には理事長になる。月末には住友総本店・住友銀行の土地へのビルディング新築の調査委員になる。総本店支配人として住友の大事業全部に参加する。仕事ぶりは、大綱を掴んで「おのずから成るを待つ」の態度で、「人を信じて人を使う」であった。

大正6年(1917)、鴻之舞金山買収で陣頭指揮を執り、大きな功績を挙げる。別子銅山の銅精錬で含金銀珪石鉍を獲ることが直接の素因であったが、鉍山は必ず老化現象を起こすので他の鉍山に事業展開することを考慮したのもであった。大正9年(1910)に鉍脈が尽きたときも徹底して調査させた結果、大鉍脈を掘り当てた。

雨龍炭鉍や空松炭鉍の買収に続き、縄地金山買収、高根金山取得、巖木炭坑取得と拡張する。銀行も増資根公開する。

12月、扶桑海上火災保険株式会社の設立発起人として、取締役役に就任する。

**財団法人懐徳堂記念会：懐徳堂は享保9年(1724)、大坂町人によって創設された学問所である。一時は、江戸の昌平学問所と並ぶ隆盛を誇った。明治2年(1896)に一旦閉校したが、大正5年(1916)に再建された。懐徳堂の復興と顕彰を進めたのが財団法人懐徳堂記念会である。再建された懐徳堂は昭和20年(1945)の大阪空襲で焼失した。昭和24年(1949)、大阪大学文学部設立時に戦災を免れた資料が寄贈された。**

理事となる

大正7年(1918)、従来の中田錦吉、湯川寛吉、久保無二雄の3名の理事を6名増やした。草鹿丁卯次郎、山下芳太郎に正恒が新たに理事になる。

大正8年(1919)、東北帝国大学附属鉄鋼研究所が、住友家の寄付で創立される。大正4年(1915)から正恒も住友の製鋼事業の関連から関わっていた。大正11年(1922)に金属材料研究所と改称。

大正7年(1918)、住友は日米板硝子株式会社の設立に出資し、経営に加わった。国力の進展に連れて、住友の事業も国際的提携に進んでいった。出向する中村が「旭硝子を押さえて日本一の硝子会社に致します。」と意気込むのに対して正恒は「先輩に追いつく、雁行するという気持ちでやれ。」と諭した。

鴻之舞鉱山周辺の一干町歩の北海道林の払下げ地を拡張して一万町歩の林業経営地を創設するために実地調査した大塚小郎の報告に対して、部下を信用して簡単に了解した。

大正8年(1919)2月、土佐吉野川水力電気株式会社が設立されて、監査役に就任する。住友は、同年春に宮崎県耳川に水力発電の計画を進め、電気製鉄事業を起こそうとしたが実現せず、開発した電力は現在の九州電力株式会社に移った。12月、大阪北港株式会社が設立され、正恒は取締役となった。このころ岡山県児島に精練所建設を秘密裏に進めていたが、正恒は、住友は若い人を嘘つきにしないとの信念から、岡山県知事に本当のことを述べて協力を仰いだ。

鴻之舞鉱山の買収以来、積極経営を主張した正恒も新鉱床が見つからず窮地に立った。重役会議で10万円を要求したが、5万円を出してもらった。探鉱の規模を大きくして強行すると、連続した富鉱帯を突き当てた。「人間というものは、失意のときには進む一方、得意のときには退く一方、これが大事である。」との中庸を尊ぶ信念を正恒は持っていた。

住友銀行も、上海、漢口支店に続き、サンフランシスコ、ボンベイに支店を設け、ホノルルに<sup>はわい</sup>布哇住友銀行を設立し、シアトルに支店、ニューヨークに出張所、ロンドンに支店を開設した。株式会社シアトル住友銀行を設立した。

電線製造所は、アメリカのウエスタン・エレクトリック会社との資本交流から株式会社となった。後に日本電気の経営権を得た。

## 常務理事(1)

大正10年(1921)2月、住友総本店は、住友合資会社となった。どの事業も進展、充実して大企業団となると、統括する中心の総本店は個人経営の姿であることは不都合となってきた。正恒は常務理事となり経理部長を兼ねた。

欧州大戦も終わり景気も頓挫して、大正9年(1920)には大恐慌となる。大正6年(1917)にはロシア革命があり、社会主義思想、労働運動が高揚する。大正7年(1918)に米騒動が発生するなど、世相は不安と動乱を深くした。住友伸銅所、製鋼所、電線製造所でも争議が起こる。

工場協議会、職場懇談会を設置する。正恒の労使問題に対する考えは、「正しい労使関係は、相互理解と信頼の人間関係に基礎を置く。」「健全な人間関係の樹立。」。争議後の10月に協調会と修養団の共催で修養講習会が開催される。

**修養団：日本の社会教育活動の基礎を築いたとされる蓮沼門三が、明治39年(1906)に東京師範学校(現在の東京学芸大学)で創立した。蓮沼の学校寄宿舎の清掃活動に集まった同志の集まりが興りである。大正期には、キャンプなどの野外活動を通じた青少年活動の手法を始めて日本に導入した。その当時、修養団が全国各地で実施した野外活動の朝礼に行われた国民体操がベースとなって、ラジオ体操が作られたとも言われている。**

修養団の別子への導入はかなり遅れたのは、鷲尾勘解治が創った「改善会」という強力な団体があったからである。三村起一は小倉正恒の命により別子に支部を結成する。三村の三安定主義(労働者の地位の安定、生活の安定、将来の安定)、改善会の精神が同調して、修養団が工場、鉱山に汗愛運動を拡めた。

**修養団の精神：愛と汗による明魂の顕現である。同胞相愛・流汗鍛錬による善風作興である。(小倉正恒談叢)**

大正11年(1922)1月、人事部長も兼ねる。12月、鈴木馬左也の社葬の葬儀委員長を務める。鈴木の後の中田錦吉が総理事になり、合資会社で直接補佐するのは正恒一人になった。従前とおりに人事部長、経理部長を兼ねた。

大正11年(1922)、再度の恐慌が起こった。その上に軍備制限条約で工業会は圧迫され、不況が続く。

大正12年(1923)9月、関東大震災が突発した。日本橋の住友銀行ビルディング、越前堀の住友の倉庫が焼け野原に残ったことと、復旧の資材を震災前の価格で販売したことで住友の名声を挙げた。

大正13年(1924)1月、電線製造所の取締役役に就任する。10月に、銀行はロスアンゼルスに支店を設置する。11月に、坂炭鉱株式会社に出資して取締役会長になる。

正恒は鉱山事業に積極的であったが、家長は別子銅山を別として炭鉱事業への進出はあまり好まなかった。

大正14年(1925)5月、住友も出資して創立した九州送電株式会社の監査役になった。同月に日本ホロタイル株式会社の取締役になった。6月に住友肥料製造所は株式会社となって、取締役会長になった。同月に日之出生命保険株式会社を買収して、取締役になった。翌年には住友生命保険株式会社と改称した。7月に住友信託株式会社の取締役になった。8月には住友製鋼所の常務取締役になった。

大正14年(1925)10月、総理事は中田錦吉から湯川寛吉に引き継いだ。

大正14年(1925)5月、家長は茶臼山の本邸を大阪市に寄付し、灘住吉へ移った。

大正15年(1926)3月、家長が永眠し、葬儀委員長として総指揮をとった。7月に組織を改めた住友伸銅鋼管株式会社の取締役になった。

## 常務理事(2)

大正から昭和に変わった時機に当たり、新旧交代の時機であった。停年制度が新陳代謝を促した。第一次世界大戦後の繁栄が、自由主義、個人主義、デモクラシーが一般化するとともに貧富差によって左翼思想が浸透する。極端な右翼思想の抬頭は、思想の混乱となり軍部独裁へと道を拓くことになっていった。住友も事業を発展させたが、むつかしい国情が圧迫を加えていた。

昭和2年(1927)7月、別子事業所は住友別子株式会社となり、取締役になった。同時に土佐吉野川水力電気の取締役になった。10月に財団法人懷徳堂記念会の理事長。

昭和3年(1928)、北海道鉱業株式会社を買収し、歌志内、新歌志内、奔別、上赤平、奈井江の5鉱を傘下に入れた。昭和4年(1929)、住友九州炭鉱株式会社を設立し、取締役になった。昭和5年(1930)4月、住友坂炭鉱、住友九州炭鉱を統合して住友石炭株式会社を設立し、取締役になった。

－記憶力の良さ・朴直さ・人間重視の人柄の記述－

昭和3年(1928)1月に住友倉庫の取締役に移る。10月に住友伸銅所の常務取締役に兼ねた。この年に「星巖集註」を自費刊行する。

－星巖先生事略を記述－

昭和4年(1929)4月、再び中国満鮮を視察巡遊する。上海－杭州－上海－蘇州－南京－上海－大連－青島－天津－大連－奉天－撫順－京城－伊川－咸興－京城－大邱－慶川－釜山の路程。

－正恒談叢から孫文の項を記述－

－視察巡遊前の中国の複雑な権力争奪を記述－

中国満鮮を視察巡遊から帰って、再び北海道を巡った。上歌志内鉱に大変災が起こり、北海道に向かう。鉱山の災害を常に恐れていた前家長の墓に頭を深く下げて謝ったのは、この時か。

## 総理事(1)

昭和5年(1930)8月、湯川寛吉の後を襲いで住友合資会社代表社員、総理事となった。この時に別子鉱山の専務・鷺尾勘解治も理事となる。

時期は、欧州大戦、関東震災、世界大恐慌と深刻な不況期であった。金山開発の結果が大きな支えとなった。最も正恒を苦しめたのは職員の待遇であった。緊急製作の徹底、給与抑制の非常手段を指揮。信託会社、銀行、ビルディングには取り締まりとなり、三社を除いてすべての取締役会長になった。

**金山開発：当時経理課長にあった川田順は「住友回想記」の中で、「小倉たち上司は強気で、鴻之舞金山に対して警戒していた私に買収の交渉に当たれと命じた。地権者8人を大阪に呼んで、ミナミの旅館に缶詰にして談判した。多量の金を産出して国益は上げたが、住友の利益にはならなかった。」と述べている。**

－総理事訓示の記述2例－

昭和6年(1931)6月、大阪商船の取締役就任した。日本郵船との合併の斡旋にあたったが、葬り去られた。

関西経済界の長老として、日本工業倶楽部理事、日本経済連盟会常務理事、関西日米協会会長、南満州鉄道監事、日本学術振興会理事などに就き多事となる。

昭和5年(1930)10月、大阪倶楽部へ蓮沼門三、本間俊平、留岡幸助を講演に招く。

－本間・留岡の紹介の記述－

昭和6年(1931)6月、大阪倶楽部へ安岡正篤を講演に招く。

－家庭での正恒の記述－

昭和6年(1931)秋、四国へ出張する。総理事になって初めて別子銅山を廻った。鷺尾勘解治は、同年2月に常務理事になったので後任に、田島房太郎が後任に就いていた。不況のため工事が中止になっていた新居浜大築港新設計画を新居浜への恩返しのためにも、完成する義務があると述べて続行させた。

**新居浜築港の継続：鷺尾が昭和6年2月に新居浜を去ると計画は縮少の宣託を受ける。村上高太郎、藤田熊次郎、田坂基、手島連三、塩崎由太郎、森実竹一、白髪茂、木下伝次(伝次郎?)、深尾猛、藤田一次、佐藤紋次、藤村金助、池田寅雄等が協議して、昭和7年2月に東新振興同志会を結成する。新居浜築港工事ほか、別子銅山後継事業の実施を要求し、小倉総理事から約束を得る。**

(郷土研究169号)

昭和6年(1931)12月、信託の取締役会長となった。同年には、大日本鉱業の経営を引き受けた。

昭和7年(1932)9月、土肥金山株式会社を買収した。2月には、株式会社新大阪ホテルが設立され、取締役会長になった。3月には、扶桑海上火災保険株式会社の取締役会長にもなった。後に住友海上保険と改称した。

正恒が総理事となって以来、産業経済界の窮迫は極まり、軍部台頭で国情は急湍に乗り入れた。満州事変、上海事件が起こり、満州国の独立となった。右翼の国家主義が活動的になる中、「私は悲観も楽観もありません」といい、中庸の道を理想と考え時世を達観していた。

#### －動乱期の設備投資の大支出の記述－

鷺尾勘解治は、昭和7年(1932)4月、常務理事を辞して欧米を巡ったが、帰国後の昭和8年(1933)12月に退職した。

昭和8年(1933)11月、家長・吉左衛門友成は、西園寺八郎の次女春子結婚し、正恒夫妻も列なった。

昭和8年(1933)になると軍需関係を中心にして不況を乗り切った。大不況の中で勢いを得ていたのは、正恒が予測した鴻之舞金山であったが、更に次々と有望な鉱脈が発見され、衝天の勢いであった。第一次事業設備拡張に続き、第二次事業設備が完成し、落成祝賀式出席を機に東北、北海道の事業視察を巡行した。

住友が政治に関与しないのは、明治初期からの不文律であったが、「以前は以前、今は今。自由経済から統制経済に急転回したので、経済活動は指揮影響を受ける。住友の事業経営の大方針を誤らないために国政に参与する。」と、勅選議員になった。

昭和9年(1934)2月に住友化学工業株式会社に改称、5月に四国中央電力株式会社と改め、6月に新居浜に住友アルミニウム製錬株式会社を設立し、11月には住友機械製作株式会社へと独立。このころからすべての鉱業部門が大発展続けた。

昭和9年(1934)5月、大阪毎日新聞「けふの人あすの人」蘭に、正恒が登場した。

昭和10年(1935)1月、大阪の藤森病院に入院し、手術を受ける。同年に、木蘇岐山の遺稿を五千卷堂集を自費で上梓した。10月には内閣審議会委員に就任した。

後任の総理事専任という大事な人事問題が迫っていた。昭和11年(1936)5月、次期総理事と目されていた川田順が辞表を提出したが、古田俊之助が理事に上がった。

昭和11年(1936)9月、北日本鉱業所を札幌に置いて、鴻之舞、国富、余市、大萱生鉱山を所管とした。昭和14年(1939)には下北の安倍城鉱山を所管に入れた。

#### －下顎部の治療の記述－

### 総理事(2)

昭和12年(1937)3月、合資会社は株式会社住友本社となった。家長が代表取締役社長となり、正恒は代表取締役に就いた。軍需素材品の製造で繁忙となる。4月、大阪朝日新聞の日曜随筆蘭に、正恒の「散歩」が載る。7月、四国中央電力の大橋堰堤工事を視察し、別子銅山に入坑する。

昭和13年(1938)1月、陸軍航空本部長の東久邇宮の新居浜視察を現地で迎えた。東久邇宮は、泉寿亭に宿泊した。

正恒は、常務理事の頃から国の各種機関・委員会の委員を歴任した。教育関係の委員にも連なり文部大臣に擬する声が出てきた。軍部抬頭の中、林内閣、近衛内閣と移り時局は日支事変へと拡大していった。時局収集に腐心した近衛らは内閣大改造で商工相専任者候補に正恒が上がった。

同1月、本社に専務理事を置くことになって、古田俊之助が抜擢された。総理事の後継者が決まった。

相前後して豪雨に見舞われる中、8月、北海道の事業視察に出かけ、北海道資源開発研究調査団を現地で迎えた。帰路に仙台、那須に寄る。9月、大阪中央放送局の依頼で「国民道徳に就いて」と題する講演を放送する。「知行合一」の実践を話す。

**古田抜擢：正恒は自らの欠点を、軽率で思慮が足りないと言っている。しかし、人事という重大な問題については慎重であった。住友本社の二常務制をやめ、古田俊之助を住友金属会社から引き抜いて、専務理事に据えた。平成16年に総理事の椅子を譲り住友を去る。(小倉正恒伝古田俊之助伝)**

**知行合一：知識と行為は一体であるということ。本当の知は実践を伴わなければならないということ。王陽明が唱えた陽明学の命題。物事が理を得るのは良知を致すからである。良知を致すのは行である。致良知も同意。**

このころ時局はいよいよ重大となり、英米との対立がし烈になってきた。昭和13年(1938)春、国家総動員法が公布せられた。4月、北支産業株式会社設立、11月、住友電気工業株式会社に改称する。

昭和14年(1939)は、正恒は多忙の年となった。5月に九州と四国、7月に松山、8月に北海道と東北を巡る。10月には四阪島の中和工場竣工式に臨んだ。明治38年(1905)の新居浜での製錬以来苦しんできた煙害問題に終止符を打った。

昭和15年(1940)は、軍部の伸長は衰えず、紀元2600年に当たり祝祭典が各地で盛んに挙行される。東亜制覇冠水の民意が盛り上がった。ドイツが全ヨーロッパを制圧しそうな勢いであった。別子開坑250年記念祝祭が、本家からはじまった。5月9日、新居浜では大山積神社の神前で、大鉾を供進して執りおこなわれた。10日の夜には正恒主催の宴が住友倶楽部で催された。5月18日には大阪で式典が挙げられた。この記念に、新居浜高等工業学校と新居浜中学校の創設資金が寄付された。愛媛県、新居浜市ほかにも寄付が納められた。

このころ正恒は、教育、精神指導にも尽力した。「新体制と教育」、「新経済体制と産業人の覚悟」、「選挙肅正と天業翼賛」などを講演でなした。

紀元2600年祝典評議会の委員として、11月、宮城前広場での奉祝式典に列なつた。住友ビルで祝典、懷徳堂で祝賀式を挙げた。12月、時局堅忍持久精神の鑑として、赤穂義士を助けた天野屋利兵衛の碑を世話人として建立した。正恒は住友の総帥として活躍していた以上に、人格、学徳、識見、人望のために時局に促されて国家的活動が多端になっていた。貴族院で行った電力問題に対する質問演説は、経済原則に基づく基本観念を打ち出した内容で、名演説と高く評価された。

昭和16年(1941)3月、大村益次郎殉難報国記念碑を大村卿遺徳顕彰会長として竣工した。4月、近衛文麿第二次内閣の国务大臣に就くことになり、住友を退職した。古田俊之助が総理事に就いた。正恒は住友主管者協議会で最後の訓示として「信用を重んじる、協力一致、国家念頭」を述べ、「身は住友を去るが、心は去らない」と結んだ。

**「翁はわかいころ、さなざまな思惟の世界に遊んだ。行仁の学としての儒学を基本として、剣の極意を伊藤一刀齋の一刀を承けた山岡鉄舟の『猫の剣法』に、禪に参じて自然に従いつつ克己し、易を高島吞象に学んで不変のえちに変を観することを学んだ。行の学としての陽明学、石門心学をたたえ、天野利兵衛に武にまさる文を見出したりもした」(住友の哲学)**

**(注) 猫の剣法：終日眠っていて木で作った猫の如く、ネズミをとらえるのを見たりしたものはない。しんし、その到るところネズミなし。無我無欲にして無事、虚無にして充足。天下に敵なし。**

## 入閣

昭和12年(1937)の第一次近衛内閣組閣の時から、正恒は国务大臣の候補になってくる。しかし、儒学者、詩人、思想家と言ってよいような人物であったが、住友の事業を離れることが出来なかった。しかし、住友の事業の後継者も心中で決まり、経済政策の憂慮から入閣する心境になった。

昭和16年(1941)4月、第二次近衛内閣組閣で、国防国家を目指しての経済政策の指揮官として入閣する。心境を「莫妄想」、「一劍綺天寒」の句を引き、捨身奉公の気魄を語った。

一親任式後、伊勢神宮－檜原神宮－住友本社－伏見桃山陵－熱田神宮－大阪－住友本邸－先祖の墓－東京と回る

7月、総辞職後の第三次近衛内閣組閣で、「政策と現実の一致」を強力に実行し得る大蔵大臣に就いた。対米の行き詰まりから3ヶ月で終わった。

9月、東條内閣組閣で大蔵大臣を留意されたが、謝断した。そして、12月8日、日米開戦が報じられた。

昭和17年(1942)3月、翼賛政治体制協議界大阪支部長を委嘱された。4月、戦時金融金庫総裁に任命された。御奉公と考え報酬は受け取らなかった。秋には修養団の関

西総局長になった。神都道場の道場長にもなった。11月、東亜経済懇談会会長に就任した。

昭和18年(1943)7月、経済提携の使命を受けて、第1回日華交驩民間製材視察団の団長として上海、南京に行った。9月、第3回東亜経済懇談会出席で北京に行き、その後10月に新京を回った。

## 中国<sup>えんりゅう</sup>淹留

昭和19年(1944)3月、国民政府は全国経済委員会最高顧問に正恒を招聘することを発表した。正恒も勉学としての郷愁が深まり、正恒の学識、人間も周知、親愛されるようになっていた。4月、初代大東亜顧問に任命せられた。「中国の経済は民間の自治に」の大原則を持ち、南京政府と重慶政府の合同を脳裏に描いていた。同月に南京に渡り、採鉱顧問会館に入った。5月、北京に出向いた。

米軍の反撃が続く中、終戦までに2回内地に帰った。沖縄が占領され、帝都が空襲に会うに至る敗戦の様相を憂え、收拾策を計ろうともした。決断の遅いのをもどかしく思いながら、南京に帰任した。

昭和20年(1945)8月、天皇の終戦の放送があった。南京政府首脳への挨拶、支那派遣郡総司令官陸軍大将の岡村寧次郎との会談、全国経済委員会解散会への出席を済ませ、中国脱出の方途を探った。歴史の大変転の中にあっても詩作、読書を楽しみ、悠悠自適の日々を過ごした。中国便の来訪も多かった。

昭和21年(1946)3月、米軍のリバティ型船の乗船が決まる。重慶側に正恒の人物経歴、中国への功績を理解する人物がいたことによる。予告ない帰国に夫人は驚喜した。戦犯の指名を覚悟していたが、極東国際軍事法廷事務局で御前会議の様子を訊問されただけで済んだ。進駐軍首脳部にも正恒の人物が知られていた。5ヶ所の地所建物も無事で、3人の子供達も無事に帰還した。

## 晩年

昭和21年(1946)、中国から帰還すると間もなく貴族院議員をはじめとしてのほとんどの公職を辞任した。昭和22年(1947)、公職追放の指定を受けた。解除は、昭和26年(1951)夏。経済界、政界から身を引いて「心同野鶴与塵遠 詩似冰壺見底清」の古詩の境地に居ることができるようになったとが、好古庵には訪問者がしばしばあって、清安を妨げた。戦後の混迷を救う方途に力を捧げて行った。文化活動援助に手を伸べて行った。」

**好古庵：吉祥寺の小倉邸の呼び名。「好古以求」の扁額を掲げたことによる。昭和26年(1951)、喜寿記念の「小倉正恒談叢」を好古庵から自費出版した。**

昭和24年(1949)、懷徳堂記念会理事長として、追放が解ける見込みがつくと復興活動に取り掛かった。旧来の恒祭典に加えて、春秋の講座を開催し、雑誌「懷徳」を復刊した。昭和19年(1944)から整理していた閑齋文庫は、懷徳堂に寄贈するつもりでいたようであったが、昭和23年(1948)、愛知大学に譲られた。

昭和26年(1951)5月、漢詩の雑誌「雅友」が正恒の協力で創刊された。

昭和29年(1954)春、義公顕彰会委員長となった。昭和30年(1955)7月、水戸黄門光圀の銅像と頌徳碑を建立した。

昭和32年(1957)、伏見稻荷の社家荷田家に伝わる稻荷山十二景詩稿三十六首の一巻を復刻、注釈執筆をして稻荷大社に献じた。

昭和20年(1945)6月に焼失した茶隴山<sup>りょう</sup>禅堂の再建を松風荘のテニスコートを予定していたが、松風荘が処分されたので実現できなかった。昭和24年(1949)4月、住友銀行が譲り受けていた鰻谷の旧住友本邸跡に簡素に建築できた。

昭和27年(1952)7月、日本板硝子株式会社の舞鶴工場落成式に、古田俊之助、大屋敦、岡橋林とともに赴いた。続いて、別府化学工業株式会社を視察した。この頃から衰えが著しくなった。垂水邸に住友各社の首脳を招いて慰勞し、北浜の住友ビルに赴き揮毫した。

昭和28年(1953)10月の伊勢神宮の第59回式年遷宮も、正恒が尽力してできた。11月の大阪府立図書館の50周年記念祝典に列席した。夏、住友のことについて書き置かないと埋滅<sup>いんめつ</sup>する恐れがあるので「小倉正恒談叢」を自家出版した。これは正恒一生の維新生活の縮図であった。

#### —小倉正恒談叢の解説記述—

高齢になってゆくとともに、親しい人が先立たれていった。その人達の伝記等が編纂されると筆を執った。その中で、鈴木馬左也の伝記編纂会の委員長に就いた。

昭和29年(1954)11月、古田俊之助と小倉正恒伝が出版された。著者の梅井義雄に好古庵で「一生を貫いて運がいい人間であった」、「無理をしないが信条」と語り、座右の銘として「忍」と「仁」を挙げた。正恒の心を遊ばしたのは、読書詩作と将棋であった。

昭和31年(1956)、同郷の鈴木大拙の鈴木学術財団の顧問となり、昭和35年(1959)、理事長に就いた。同年11月、沫若文庫建設発起人会の代表になり、昭和36年(1960)春、建設委員会が設けられて建設に着手した。文化交流を日中間だけでなくアジア全体に広げ、アジア文化図書館とアジア文化研究所並びにアジア文化研学院の建設とした。昭和32年(1957)5月にアジア文化図書館が落成した。アジア文化学院は11月に落成し、昭和37年(1962)4月に開校した。

修養団については、関西会館の復興建設に尽力し、昭和35年(1960)春、東京青年文化会館を建設した。

昭和36年(1961)末から衰えを加えていった。11月20日、永久の眠りに入った。22日密葬、25日葬儀が執り行われた。葬儀委員長堀田庄三が弔詞を述べ、吉田茂が

友人代表の弔詞を述べた。会葬者は2千数百人を数えた。住友家長は死を悲しんで、「淡々と君は在りしが身を持する 心はつねに国思ひにき」と詠んだ。

**鈴木大拙**：仏教哲学者。明治3年(1870)に金沢に生まれる。東京大学哲学科卒。鎌倉円覚寺の今北洪川、釈宗演に師事し禅の研究に務める。明治30年(1897)渡米し「大乘起信論」、「大乘仏教概論」の英文出版を行う。明治42年(1909)帰国後、学習院大学教授、大谷大学教授。英文雑誌「イースタン・ブディスト」を創刊するなど広く海外に紹介。大拙は仏教の核心に、靈性の自覚を見出した。靈性の自覚とは、「即非の論理」の体得である。著書に「禅と日本文化」、「日本的靈性」、「東洋の心」等がある。

※即非の論理：金剛般若経における代表的な表記。Aというものは、Aと名づけたと即時に「A」と「非A」に分別されているということである。すなわち、論理的縁起関係として「Aによって非Aがあり、非AによってAがある。」として、「非A」によってこそ、「A」は「A」でありうる。

## 6. おわりに

鈴木馬左也との関係話を話すときは、「鈴木馬左也」を引用しているので、「鈴木馬左也」を読んでいるような錯覚を覚えた。「ようである。」と語尾が推量になっていて、資料からの記述で曖昧模糊とした印象が残る。

正恒が住友に在籍した期間の住友の出来事が記述され、人物が伝記、記述本から引用されて記載される。正恒自身についての人物描写は少ない。正恒の時間経過につれて、住友の人物模様と事業模様というべきものである。読んでいて面白味に欠ける。舞台に登場する歴史の役者の立ち回りでの住友の歴史の記述、戦時の記述である感がぬぐえない。漢詩が読めれば、正恒のその都度の心境が理解できたことは確かである。

正恒の事業経営者としての意識と行動を分析した本を併行して読まないで、心の深淵に踏み込んでいけない。正恒は、若い時から体が弱かったが、努力と修練で満80歳まで健康を保ってきた。意志が強く努力の人であったと言えよう。歴史が時間の経過とともに変化していく中に潜む「不変」とは何かを「東洋の心」として探究した人でもあった。

### 【参考文献】

小倉正恒伝古田俊之助伝	梅井義雄	東洋書館	昭和29年11月25日
小倉正恒談叢	小倉正恒	好古庵	昭和30年 8月20日
小倉正恒	神山 誠	日月社	昭和37年11月20日
住友の哲学	菊地三郎	風間出版	昭和48年 2月15日
近代住友の経営理念	瀬岡 誠	有斐閣	平成10年10月25日